[検証シリーズ]

「美しい分煙社会」の作り方

第4回 「対立より共存」という成功例

須田慎一郎
（ジャーナリスト）

前回までに、全国に先駆けて受動喫煙防止条例を制定した神奈川県で、喫煙者が住みにくい街になったことで経済が疲弊し、多くの産業が危機に陥り、市民生活にも多大な悪影響が出ていることをレポートした。

しかし、取材を重ねるなかで「分煙社会」の光明も見えてきた。神奈川をはじめ、政府も法制化で進めようとしている「分煙」は、実は「喫煙者排除」の論理でしかないが、その「たばこは悪」「喫煙者は悪人」という考え方を捨て、「対立ではなく共存」というシンプルな観点でビジネスを成功させた例は実は多い。今回は「美しい分煙社会」の成功事例を紹介する。

＊

日本一の繁華街である東京・銀座。一般には夜の歓楽街のイメージが強いが、週末には歩行者天国で賑わう都内随一のショッピング街でもある。多くの百貨店が軒を連ねる中央通りの歩道には、つい最近まで灰皿が置かれていた。

銀座のある中央区は04年6月に「歩きたばこ及びポイ捨てをなくす条例」で区内の主要エリアの歩行喫煙を禁じたが、地元商店会は「銀座を訪れる大人のお客さまのため」という理由で灰皿の設置を継続した。

銀座のメーンストリートだけに、この「生き残った灰皿」は喫煙者からも非喫煙者からも注目された。中央区には反対派からのクレームが寄せられるなど、銀座ファンを巻き込んだ一大論争に発展したほどだ。

今年4月についに撤去されるまで、7年近くにわたって続けられた「中央通りの灰皿」について、商店会関係者が振り返る。

「銀座を訪れるお客さまのために維持してきましたが、灰皿の利用実態を調査してみると、最近では来訪者というより、周辺の勤務者が主に利用していることが判明しました。すでに役目を終え、別の使われ方をしていたということで撤去を決めました。ただ、銀座周辺には十分な喫煙スペースがないことも事実で、締め出された喫煙者が裏通りにポイ捨てするなど、別の問題が起きないか注意深く見守っているところです」

7年の間に、少なくとも昼間訪れる家族連れは、灰皿なしでもショッピングを楽しめるようになったということかもしれない。そうだとすれば理想的な変革が成し遂げられたことになるが、いずれにせよ、行政の意向とぶつかっても、7年間にわたって喫煙者の居場所を確保し続け、「お客さまのため」と信念を貫いた商店会の努力あっての成功であることは間違いない。

だからこそ、神奈川とは違って銀座の繁栄は保たれたのだろうし、その間に新しい「共存スペース」は確実に進化したのである。

店の真ん中に喫煙スペース

厚生労働省の調査では、日本人の喫煙率は21・8％（08年）。減少傾向とはいえ、今も5人に1人が吸っている。喫煙客を排除するだけでは、飲食店やホテルは市場の2割を放棄することになる。神奈川の失敗は当然といえば当然だった。

逆に、法や条例による抽速な規制とは一線を画し、しかし非喫煙者の快適さも追求する分煙空間を作り上げて集客につなげているビジネスモデルも多い。

東京駅丸の内口の正面に立つ「新丸ビル」では、5階のレストラン街にレンガ造りの喫煙所を構え、快適な雰囲気を醸し出している。同ビルの開発を担当した三菱地所ビルアセット開発部副長・岡田忠夫氏が、そのコンセプトを語る。

新丸ビル（右）、東京ミッドタウン（左）も快適な喫煙スペースで成功

「お客さまの目線で考えました。当然、たばこを吸う方も吸わない方もいらっしゃるので、ホスピタリティを重視し、お互いが嫌な思いをしないで済むような空間を目指しました」

07年に東京・六本木にオープンした東京ミッドタウン。その中心に位置する商業施設・ガレリア2階の喫煙所は、訪れる喫煙者が「こんなに眺めがよくて気持ちよい喫煙所は初めて」と口を揃える。全面ガラス張りで、眼下に広がる公園を眺めながら一服できる開放的な空間であり、一番奥にはゆったりと腰を下ろせる椅子まで配されている。

“喫煙者は日陰者”とは正反対のイメージ（アマランティ店内の喫煙スペースと福政社長）

「せっかくお客さまにミッドタウンを楽しんでいただいているのに、閉塞感のある喫煙所で台無しにしてはいけない。吸わない方にご迷惑がかからないように、誰もが利用するトイレから離すなどの配慮もしています」（広報担当者）

東京を代表する前記2つの施設だけでなく、郊外に次々とオープンするアウトレットモールや大型ショッピングセンターでも、ラグジュアリーな喫煙空間を用意する動きが広がっている。新しい施設であれば、設計段階から「美しい分煙」を考えられるからだ。その意味でも、この問題で拙速は禁物なのである。

東京だけではない。

今年5月4日、JR大阪駅周辺はデパートやホテルなどが集う複合商業施設に生まれ変わった。その中のファッションビル「ルクア」の一角にオープンしたのが、「イタリアン&ドルチェカフェ　アマランティ」である。同店がユニークなのは、喫煙できる空間が、なんと店の中心にあり、しかも周囲からひときわ注目を集める中2階スペースである。空気の流れで煙をシャットアウトする「エアカーテン」によって天井に煙を流すシステムのため、仕切り板がないにもかかわらず、周囲には煙が漏れていない。アンティークの椅子が置かれ、さながらVIPルームの風情である。

この意欲的な取り組みをしたアクアプランネットの福政恵子社長の話。

「ここに集うのは大人同士。吸う人も吸わない人もお互い迷惑をかけずに楽しめる空間を提供したかった。たばこを吸うだけの場所ではありませんから特にアナウンスはしていません。分煙システムは500万円ほどかかりましたが、お客さまの満足度の幅を広げることができたと思っています」

現在、同社では東京などに11店舗を展開し、いずれも喫煙可能となっている。

「そのほとんどが黒字で、この夏以降は店舗改革によって全店が黒字化予定」（福政社長）だという。

従業員の受動喫煙問題についても、福政社長は「このようにたばこの煙が残らない空間を作れば解決する」と明快だ。

こうした例を見て、政治家や行政が「やはり分煙できるじゃないか」と居直るのは間違いだ。成功例に共通するのは、「吸う者も吸わない者も満足するために」というコンセプトだ。「喫煙者を追い出せ。やらないなら罰金だ」という行政の姿勢とは正反対なのである。

（この稿続く）

取材協力／入江一（ジャーナリスト）